

クリエイティブ・クラスの理論における「寛容性」とその限界

トロントを事例に

神戸大学大学院人文学研究科 大川内 晋

1. キーワード

寛容性, 社会的排除, 創造都市論, クリエイティブ・クラス

2. 目的

クリエイティブ・クラスの理論 (Florida,2002) は, 現在までに批判も含めて様々な議論がなされてきたが, 先行研究によるとクリエイティブ・クラスが集積する都市の社会的変容については, 今まで充分には語られてこなかった. 本報告では, クリエイティブ・クラスを都市に集積させる指標の1つとして用いられる「都市の寛容性」にとりわけ注目し, クリエイティブ・クラスが提唱された2000年代の約10年の社会変容を踏まえながら, クリエイティブ・クラスの理論の展開と都市社会がどのように結びついていったのかを明らかにする.

3. 方法

方法としてトロントをケーススタディに用いて検討を試みる. トロントを選択する理由はフロリダらの調査でトロント都市圏におけるクリエイティブ・クラスを含んだ階級別の職場及び居住地がマッピングデータとして明らかにされていること, また市民の半数以上が海外出生者で構成される都市であることによる.

4. 結果

結果はクリエイティブ・クラスが居住し, かつ働いているのは移民の割合が低く, 地価が高く, 低所得者の割合が低い地域である. ちなみにアーティストは必ずしもそうではなく, 地価が低くて低所得者の割合が高いダウントウン周辺にも集積を見て取れる.

5. 結論

分析から浮かび上がる問いは, フロリダの「寛容性」という概念は, 一体誰にとっての寛容性であったのかということである. フロリダの分析による限りトロントは極めて寛容な都市である. しかし, その「寛容性」を構成している移民の多くが, 低所得者の割合やサービス・クラスの割合が高い郊外に住んでいる. このことは, フロリダの「寛容性」が極めて限定的な概念であるということを示してはならないだろうか.

結論として, フロリダが主張した「寛容性」は都市内部の様々なマイノリティの割合を示すが, マイノリティが抱える社会的不平等や経済的格差社会的の問題を多分に含んだまま, 都市の選好の条件として都市政策に採用されることとなった. 「寛容性」という枠組みに収斂するマイノリティは, マクロな視点では文化多様性を生み出しているように見えるものの, 実際には都市社会における社会的不平等や経済的格差の大きな被害者となっている. これこそがフロリダの「寛容性」が, 社会的排除を生み出すことになる構造上の問題である. そこがフロリダの都市の分析に大きく欠落していた視点であり, ここにクリエイティブ・クラスの理論の限界を指摘できる.

文献

Florida, Richard. 2002. *The Rise of the Creative class*. New York: Basic Books. (=井口典夫訳 2008. 『クリエイティブ資本論—新たな経済界級の台頭』ダイヤモンド社.)